

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第404号 平成24年10月1日

龍譚寺

先日、機会があって、浜松市内にある龍譚寺を訪れました。

この古刹は、今から1300年前の天平5年に、行基菩薩により開創された、臨濟宗妙心寺派のお寺です。また、井伊家の菩提寺としても有名ですが、取り分けこの寺を世に知らしめているのは、庭が小堀遠州の作と伝えられているからに他なりません。私も、小堀遠州の庭を見るのが楽しみで龍譚寺を訪れたのですが、期待に違わず素晴らしい庭でした。

この庭の素晴らしさを、見ていない人に言葉で説明するのは私の力の及ぶところではありませんが、私の感想を含めて紹介したいと思います。

龍譚寺の庭園は、江戸時代初期に本堂の北庭として築かれた池泉鑑賞式の庭園であり、中央に守護石、左右に仁王石、正面に礼拝石が配されると共に数多くの石組みで瀧や溪谷、鶴亀が表現されています。更に、池の形が「心字池」となっており、寺院庭園としては代表的な庭とされています。また、春はさつき、秋は満点星（どうだん）と四季折々の変化にも富んでおり、昭和11年、国の指定名勝記念物となっています。まさに、東海第一の名園と呼ぶにふさわしい庭といえましょう（龍譚寺編集「龍譚寺」から）。

小堀遠州は、天正7年（1579年）近江国に生を受け、10歳の時に利休に出会い、15歳の頃には大徳寺春屋宗園禅師に参禅して修行を積むと同時に、和歌、連歌の手ほどきを受けています。

お茶は古田織部に学び、18歳の時には水はけが悪かった茶室前の蹲踞に瓶を仕込み、洞水門（今日の水琴窟）を考案して織部を驚かす等、天賦の才に恵まれた人物でした。

30歳で駿府城作事の成功により家康から遠江守を任せられ、その後伏見奉行に抜擢されますが、遠州は、その重責を担いながら、同時に、大阪城天守閣、仙洞御所、金地院の数寄屋から庭の作事を行っています。更に、三代将軍徳川家光の茶道指南役としても活躍していたという事ですから、才能ばかりではなく政治力を含めた器量の大きさは相当のものだったと思われます（小堀宗実著「茶の湯の不思議」から）。

また、小堀遠州は、茶の湯に「綺麗さび」という新境地を開いた人でもあります。

この「綺麗さび」というのは、「侘びさび」という利休の高い精神性を受け継ぎながら、そこに気品ある美しさや明るさ、豊かさを加えたもので、動乱の時代から平和で安定した時代への変化を映し出したものといえるでしょう。

そして、この「綺麗さび」は、小堀遠州の作事による建物や庭に色濃く反映されています。

作庭家の野村勘治氏は、「綺麗さび」について、「遠州の王朝趣味が培ったエレガンス、中国・西欧趣味にみる囚われのないエキゾチシズム、建築の構造美にみるインテリジェンス」と評しています（同氏監修「小堀遠州—気品と静寂が貫く綺麗さびの庭」）。また、同氏は、「遠州の庭に貫通する綺麗さびの代表である直線美には、建築の構造美に精通する遠州ならではの妙がある。」と述べています。

龍潭寺の庭もまた、池の西の護岸は直線的で遠州好みであることが分かります。

この庭には、大小様々な石が配置されていますが、いずれも禅僧が静かに端座している姿に似て、小堀遠州の独特の世界観がここに映し出されているように感じられます。

小堀遠州という人は、建築家であり造園家でもある。茶人であり歌人でもある。更に陶芸家であり書家でもあるというように、文字通りのマルチ人間でした。しかも、いずれの分野でも傑出した力を発揮していますが、龍潭寺を訪れて、改めてその凄さを実感しました。

それと同時に、素晴らしい建物と庭がそのまま現代に受け継がれ、多くの人々の心を豊かにしてくれている事にも、感謝したいと思っています。（塾頭：吉田 洋一）